

■ 今月のメッセージ(2010年7月)

日本銀行富山事務所長

水上 誠一

日本サッカー頑張りました。日本代表チームはスタッフを含め強い結束力で最後まで戦い抜きました。チーム日本としても、全国民が一つになって盛り上がりました。ただ、振り返ってみると、開幕前のテストマッチで4連敗を喫したときのマスコミ報道や国民の冷たい反応に比べると、本番での興奮は様変わりの感があります（勿論私も例外ではありません）。監督も選手も口々に「国民の皆さんの応援」に対する感謝の言葉を述べていましたが、応援があったから成果が挙げたのではなく、成果を挙げてくれたので応援に力がこもってきた、というのが事実でしょう。

「何を言いたいのか？」とツッコミを受けそうですが、この応援の話を経済問題にひっかけて、こうした国民性をちょっと見直してみても、ということなんです。さて、我が国が直面している課題を克服していくためには、新たな成長戦略を練り、簡単に人真似のできない世界で一番の技術・アイデア・サービスを次々と生み出していく必要があります。そのためには、自ら進んでリスクを負う「挑戦者」を育てていかなければなりません。そこでよく言われるのが、欧米人は「出る杭を引き上げる」が、日本人は「出る杭を打つ」ということ。より違いを強調すれば、欧米人はそもそも杭が出るように育てたうえで、杭がしっかりするまで応援を惜しみません。一方、日本人はそもそも杭が出ないように育てたうえで、出てきた杭は積極的に打つか、冷ややかな視線で軽視するか、の対応をし、さらに、「打ち損ねた杭が自助努力を続け欧米に認められた途端、手を翻したように一挙に群がる」、と表現する人さえいます。

こうしたメンタリティで、これからの日本に必要なたくさんの「挑戦者」を次々に生み出していけるのでしょうか。テストマッチで勝てない日本代表チームを冷たく扱い、健闘した途端に熱狂する様子を見ると、そんな思いが頭をよぎってしまうのです。

岡田監督は、偉大なる「挑戦者」です。13年前に、自分の家族にまで嫌がらせを受け、「負けたら今の家に住めなくなるかもしれない」と家族に告げなければならなかった人が、今回もまたつらい役目を引き受け、「ベスト4」を目標に掲げ、再度果敢な挑戦を実行したのです。監督は就任以来、どんなバッシングを受けようと、一貫した信念を口にしてきました。それは、テストマッチでの連敗で崩れるものでもなく、本番に入ってから「チームの急成長をどうお考えですか」という問いに対して「我々は何も変わっていません。我々のサッカーをやるだけです。」と一貫して答えていたように、勝利で浮足立つものでもありませんでした。

今、日本経済に必要なことの一つは、目先の需要を追うだけでなく、こうした挑戦者をしっかりと支援し、成果が出るまで育てていく、あるいは前向きな失敗は許す、という全国的合意だと思います。我々の大事な税金についても、これを国民が出資者である「日本国再生ファンド」ととらえ、リスクがあっても成長基盤強化に資する分野に果敢な資金シフトを行い、日本なしに生きていけない世界を作り出すために活用するんだ、と考えてみてはどうでしょうか。

日本がフリーキックを得た時の相手チーム監督の恐怖の表情を思い出して下さい。全ての日本人がたゆまぬ努力を続け、世界に通用する強みを着実に積み重ねていけば、4年後のワールドカップは、日本代表チームなしには考えられない大会になっていることでしょう。